



ストローで作ったフィンランドの伝統装飾「ヒンメリ」

シバセ工業

北欧フィンランドの伝統装飾「ヒンメリ」とストロー。同社は意外な用途の組み合わせに注目し、2021年、ヒンメリの制作用ストローを独自開発し販売した。ヒンメリとは麦わらに糸を通して出来る多面体をつなぎ合わせた幾何学的な造形品だ。

きっかけは新型コロナウイルス禍の奥で、ヒンメリ作家が麦わら

ストロー 新需要吸い上げ

プラスチック製ストローを製造するシバセ工業(岡山県浅口市)は国産業務用の売上高シェアで首位に立つ。ストローは環境問題を受け飲料用で逆風を受けるものの、新たな需要を創出するともに飲料と並ぶ工業・医療向けの商品を開発する。製品開発にかかる時間とコストを抑える技術を開発して成長に挑む。

北欧伝統装飾や医療向け

何がすごい？シバセ工業のストロー

▼精密さを確保する技術力

直径や扁平(へんぺい)率をレーザーセンサーで常時監視

▼新製品開発までのスピード

相談から納入まで最短1カ月ほど。金型不要のためコストも小さい

▼「御社の製品できません」とは言わない

機械設計、システム開発など多彩な技術者を擁する。装置を自分たちで改造し、応用範囲を広げる

zoom
シェアトップ

らの代わりにストローを使ったキットの販売やイベントを開催したところ、シバセ工業にもヒンメリストローを作っていないか問い合わせがあったことから、キット開発にすぐ動いた。

全国の愛好家などのようなニーズがあるかを聞き取り、通常よりも細いサイズに需要があると判明。麦わらよりも長くしなやかな色とりどりの商品を増やしたりして表現の幅を広げた。割れにくく安全という利点もある。玉石一馬営業部長は「強烈

な手応えではないがじわじわ増えている。ニッチなところでもかなりの需要がある」と手応えを感じている。

シバセ工業は1949年に精米麦・そうめん加工販売として設立した。

年間売上高は4・1億円。明治時代、現在の浅口市がある地域は麦の加工が盛んだった。1901年「麦に麦わらを原料としたストロー生産が始められ、プラスチックが主流となった現在も製造会社が集まる。シバセのほか川崎商會もその一つ。

シバセ工業によると飲食店などで使う国産業務用ストローの売上高を公表している事業所の中で「売上高に占める当社売上高は約6割で1位」(営業部)だ。

もっともプラスチック「ごみ」問題が迫る中、飲料向けは苦戦を強いられる。アイスコーヒー用やカヒオカ用などの用途やカラーバリエーション、サイズなどの選択肢が豊富で約200種類に上るものの、今後の伸び率は限られる。

その分、もう一つの柱である工業・医療用を強化する。外壁や肉厚、長さ自在に調整でき、先端を特殊な形状に加工できる特徴を生かして器具のパッケージなど200種類以上を開発してきた。回路設計、機械設計、システム開発など様々な分野での経験を持つ技術者を擁する。これが他社にはない強みといえる。既存の機械で対応できない要望については装置を

自分たちで改造して製造可能な範囲を広げた。0・1mm単位での外径調整や先端特殊加工で高い技術力を発揮する。直徑や扁平(へんぺい)率をレーザーセンサーで常時監視し、基準値よりずれると自動で廃棄する仕組みを採用する。

ストローの製造には金型が不要のため、問い合わせが来たら1週間ほどで試作できる。正式発注から納入まで2〜3週間で、短期間のため、発注元が試作品を試す期間を23年には社内業務で

間を含めて最短1カ月は、新製品の開発が可能だ。開発や試作の期間、コストが小さくて済み、ニーズの発掘から市場投入までが速い。

例えば2006年、三車県のタクシー会社にアルコル検知器のマウスピースの代わりに開発した短いストロー。これは3週間ほどで販売した。11年に運送会社などで検知器使用が義務化されること、規格品にしていたこととで一気に需要が高まった。23年には社内業務で

検知器を運ぶ「白ナンバー」の検知器使用が義務化し再び需要が伸びる。今では同社の主力商品だ。シバセ工業は売り上げを毎年10%増やす目標を掲げる。25年秋には10億円ほどかけて、現在の本社工場の約3倍の規模を持つ新工場を稼働させる予定。工業・医療用を増産し収益を拡大し、新規事業に投資する戦略だ。玉石氏は「新工場を需要創出のための起爆剤とする」と話している。

(中野 大)